

雛がたり

泉鏡花

青空文庫

ひな 雛——女め夫おと雛びなは言うもさらなり。桜さくら雛らびな、柳やなぎ雛びな、花菜はなな

の雛、桃はなびなの花雛、白ひと緋ゆかりと、紫むらさの色のす堇みれば雛ひな。鄙ひなには、つく

し、鼓たんぼ草ぼの雛。相あい合あ傘いがさの春はる雨さめ雛ひな。小さ波さな軽なみく袖そでで漕こぐ浅あさづ

妻まづ船ねの調しらべの雛。五ご人にん囃ば子やし、官かん女じよたち。たただだあの狎ちんひきという

のだけは形しなも品しなもなくもがな。紙かみ雛ひいな、島しまの雛、豆まめ雛ひいな、い

ちもん雛びなと数かずうるさえ、しおらしく可な懐つかしい。

黒くろ棚だな、御み廚ず子し、三みつ棚だなの堆うぎは、われらら町ちやう家うかの雛ひな壇だんには

些ちと打うち上あり過あぎるであろう。箏たん筥す、長なが持もち、挟はきみばこ、金きん高たか

蒔ま絵え、銀ぎん金かな具ぐ。小ひ指きぐらいな抽ひ斗きをあけると、中あがあかいの

も美うたい。一いつそうの双びの屏びやう風ぶうの絵えは、むら消せえの雪ゆきのこ松まつに丹

頂うの鶴、雛ひなづる鶴。一つは曲きよくすい水すいの群ぐんじょう青せいに桃さかの盃ざい、絵え雪ゆき
 洞ほら、桃もものような灯ひともを点ともす。……ちよつと風情ふぜいに舞まい扇おあぎ。

白しろざけ酒ざけ入れたは、ぎやまんに、柳やなぎさくらの透すき模様よう。さて、お

肴さかなには何なによけん、あわび、さだえか、かせよけん、と榮さや螺ほ蛤まぐりが唄うた

になり、皿しらうおの縁えりに浮ういて出でる。白しろ魚うおよし、小こ鯛たいよし、緋ひの毛もうせ

氈んに肖につかわしいのは柳やなぎ鰈がれいというのがある。業なり平ひら蜺しじみ、

小こ町まち蝦えび、飯い鮓だこも憎うらからず。どれも小こさなほど愛あいらしく、器うつわも

いずれ可かわい愛あいいほど風情ふぜいがあつて、その鯛たい、鰈がれいの並とんだ処ところは、雛

壇壇の奥おくさながら、竜宮りゆうきゆうを視みるおもい。

(もしもし何ど処こで見たみた雛ひななんですえ。)

いや、實際むつ六むつ、七歳ななつぐらいの時に覚おぼえている。母親ぼてんの雛ひなを思おもう

と、遙かに竜宮の、幻のような気がしてならぬ。

ふる郷も、山の彼方に遠い。

いずれ、金目のものではあるまいけれども、紅糸で底を結え
 た手遊の猪口や、金米糖の壺一つも、馬で抱き、駕籠で抱え
 て、長い旅路を江戸から持つて行つたと思えば、千代紙の小箱に
 入つた南京砂も、雛の前では紅玉である、緑珠である、
 皆敷妙の玉である。

北の国の三月は、まだ雪が消えないから、節句は四月にしたら
 しい。冬籠の窓が開いて、軒、廂の雪がこいが除れると、北
 風に轟々と鳴通した荒海の浪の響も、春風の音にかわつて、
 梅、桜、椿、山吹、桃も李も一斉に開いて、女たちの眉、唇、

裾すそ八口やつくちの色も皆みな花なのように、はらりと咲く。羽子はごも手鞠てまりもこの

頃おいはごから。で、追おいはご羽子この音、手鞠てまりの音、唄うたの声こえ々ごえ。

……ついて落おといて、裁たちかた形かた、袖そで形かた、御手おんてに、蝶ちょうや……花。

……

かかる折ひももから、柳こみち、桜うらら、緋桃さくらの小路ちを、麗うらかな日ひに徐そつと通とる、

と霞かすみを彩いろどる日光ひざしの裡うちに、何処どこともなく雛ひなの影かげ、人形ささまよの影かげが徜徉さまよう、

……

おぼろよ
 朧おぼろ夜よには裳もの紅くれない、袖そでの萌黄もえぎが、色いろに出でて遊あそぶであらう。

——もうお雛ひな様さまがお急いそぎ。

と細ほい段たんの緋毛氈ひもうせん。こここゝで桐きりの箱はこも可懐なつかしそそううに抱だきしめしめるよ

ううに持もって出でて、指蓋さしふたを、すすつつと引ひくと、吉野紙よしのがみの霞かすみの中なかに、

お雛様とお雛様が、紅梅こうばい白梅はくばいの面影おもかげに、ほんのりと出て、口くちちもとちもと許こころに莞爾にっことし給たまう。唯と見て、嬉うれしそうに膝ひざに据すえて、熟じつと視みながら、黄金こがねの冠かんむりは紫むらさき紐ひも、玉たまの簪かんざしの朱ししゆの紐ひもを結ゆい参まゐらす時の、あの、若い母ははのその時の、面影おもかげが忘れわれない。

そんなら孝行こうぎやうをすれば可いいのに——

鼠ねずみの番ばんでもする事ことか。唯ただ台所だいどころで音ねのする、煎いり豆まめの香かに小鼻こはなを怒いからせ、牡丹ぼたんの有あ平糖へいとうを狙ねらう事こと、毒どくのある胡蝶こちように似にたりで、たちすがた立た姿すがたの官女かんじよが捧ささげた長柄ながえを抜ぬいては叱しかられる、お雛はやし子の侍さむらいえぼうし烏帽くわぼうし子こをコツンと突ついて、また叱しかられる。

ここに、小ちさな唐草からくさ蒔まき絵えの車くるまがあつた。おなじ蒔まき絵えの台たいを離はなして、轆ながえをそのまままに、後うしろから押おすと、少すくし軋きしんで毛氈けしんの上うへをすべり

る。それが咲乱さきみだれた桜の枝を伝うようで、また、紅くれなの霞なみの浪を漕ぐような。……そして、少しその軋む音は、幽かすかに、キリリ、と一種の微妙なる音楽であつた。仲よしの小鳥が嘴くちばしを接あわす時、齒はえぎの生際はえぎわの嬰兒あかんぼが、軽焼かるやきをカリリと噛む時、耳みみを澄すますと、ふとこんな音ねがするかと思う、——話は違ちがうが、（ろうたけたるもの）として、（色白いろしろき児この苺いちごの苺いちご）枕まくらの草紙そうしは憎にくい事を言つた。わびしかるべき莖くくだちの浸ひたしもの、わけぎのぬたも蒔絵まきゑの中。惣そうざい菜さいものの蛸しじみさえ、雛おまえの御前まかんづに罷まかんづれば、黒小袖くろこそで、浅葱あさぎの襟えり。海のもの、山のもの。笥たかなの膚なはだも美少年うつくし。どれも、食くいものといふ形かたちでなく、菜の葉はに留とまれ蝶ちようひとと齊ひとしく、弥生やよいの春はるのともだちに
見える。……

そでがた おしえぎいく はし
 袖形の押絵細工の箸さしから、銀の振出し、という華奢なもので、小鯛には骨が多い、柳鰈の御馳走を思出すと、ああ、酒と煙草は、さるにても極りが悪い。

其角句あり。——もどかしや雛に対して小盃。

あの白酒を、ちよつと唇につけた処は、乳の味がしはしないかと思ふ……ちよつとですよ。

——構わず注ぎねえ。

なんかで、がぶがぶ遣つちや話にならない。

金岡の萩の馬、飛驒の工匠の竜までもなく、電燈を消して、

雪洞の影に見参らす雛の顔は、実際、唯瞻れば瞬きして、やが

て打微笑む。人の悪い官女のじろりと横目で見るのがある。――

―壇の下に寝ていると、雛のはなしごえ話声が聞える、と小児こどもの時に聞いたのを、私は今も疑いたくない。

で、家かちゆう中が寝静まると、何処どこか一ヶ所、小屏風こびょうぶが、鶴の羽に桃を敷いて、すツと廻ろうも知れぬ。……御睦おんむつましきにつけても、壇に、余り人形の数の多いのは風情ふぜいがなからう。

但し、多いにも、少いにも、今私は、雛らしいものを殆ど持たぬ。母が大事にしたのは、母がなくなつて後のち、町に大火があつて皆焼けたのである。一度持出したとも聞くが、混雑まぎに紛れて行方を知らない。あれほど気を入れていたのであるから、大方は例の車に乗つて、雛たち、火を免れたのであろう、と思つている。

その後こういう事があつた。

なおそれから十二、三年を過ぎてである。

逗子ずしにいた時、静岡の町の光景さまが見たくつて、三月の中なかばと思
う。一度彼処あそこへ旅をした。浅間せんげんの社やしろで、釜かまで甘酒を売る茶店へ
休んだ時、鳩つばと一いつしよ所に日南ひなたぼっこをする婆あべさんに、阿部川あべかわの川
原わらで、桜の頃は土地の人が、毛氈じゆうづめに重じゆうづめ詰めもので、花の酒宴さかもり
をする、と言うのを聞いた。——阿部川の道を訊たずねたについてで
ある。——都路みやこじの唄うたにつけても、此処ここを府中ふちゆうと覚えた身には、
静岡へ来て阿部川餅もちを知らないでは済まぬ気がする。これを、お
かしなものきなこの異名だなどと思われては困る。確かに、豆粉きなこをまぶ
した餅である。

賤機山しずはたやま、浅間せんげんを吹降ふきおろす風の強い、寒い日で。寂しい屋敷

町を抜けたり、大川おおかわの堤防どてを伝つたりして阿部川の橋たもとの袂たもとへ出て、俵くるまは一軒の餅屋へ入つた。

色白で、赤い半襟はんえりをした、人柄ひとがらな島田しまだの娘むすめが唯一ただ一人で店にいた。

——これが、名代なだいの阿部川だね、一盆おくれ。——

と精々きだはち喜多八の気分を漾ただよわせて、突つきだ出し店の硝子戸がらすどの中に飾つた、五つばかり装つてある朱の盆へ、突いきなり如立いきなりつて手を掛けると、娘が、まあ、と言つた。

——あら、看板ですわ——

いや、正しょうのものひざくりげの膝栗毛いさせで、聊いさせか気分なるものを漾ただよわせ過ぎた形がある。が、此処ここで早速ほおば頬張きびしよつて、吸子てじやくの手酌てじやくで飲やつた

処ところは、我ながら頼母たのもしい。

ふと小用場こようばを借りたくなつた。

なかど

中戸を開けて、土間をずつと奥へ、という娘ねえさんの指図さしずに任せ

て、古くて大きいその中戸を開けると、妙な建方たてかた、すぐに壁で、

壁の窓からむこう土間の台所が見えながら、穴を抜けたように鉤かぎ

の手に一つ曲つて、暗い処をふつと出ると、上あがり框かまちに縁えんがつい

た、吃驚びっくりするほど広々とした茶の間。大々だいたいと炉いろりが切つてある。

見事な事は、大名の一ひとたてぐらいは、楽に休めたらうと思う。薄

暗い、古畳。せき寂ひとけとして人気がない。……猫もおらぬ。炉ろに火の気

もなく、茶釜も見えぬ。

遠くで、内井戸うちいどの水の音が水底みなそこへ響いてポタン、と鳴る。不

思議に風が留やんで寂ひっそり寞りした。

見上げた破風口はふうちは峠たけほど高し、とぼんと野原へ出たような気がして、縁えんに添そいつつ中土間なかどまを、囲炉裡いろりの前を向うへ通ると、桃ももさくらばつ桜さくら澆やうと輝くばかり、五壇ごだん一面の緋毛氈ひもうせん、やがて四畳半いっぴを充ま満みいに雛、人形の数々。

ふとその飾った形も姿も、昔の故郷の雛によく肖にた、と思うと、どの顔も、それよりは蒼白あおしろくて、衣きぬも冠かむりも古雛ふるびなの、丈たけが二倍ほど大きかった。

薄暗まひるい白昼まひるの影が一つ一つに皆映うつる。

背後うしろの古襖ふるふすまが半ば開あいて、奥にも一つ見える小座敷こざしきに、また五壇の雛がある。不思議や、蒔絵まきえの車、雛たちも、それこそ寸す

分ぶん違たがわない 古郷ふるさとのそれに似た、と思わず伸のび上ありながら、ふ

と心づくくと、前の雛壇ひなだんにおわするのが、いずれも尋常ただの形でない。

雛は両方さしむかい、官女たちは、横顔やら、俯向うつむいたの。お囃は

子やしはぐるり、と寄つて、鼓つづみの調糸しらべを緊しめたり、解といたり、御殿火ごてんひ

鉢ばちも楽屋ありさまの光景。

私は吃驚びっくりして飛退とびのいた。

敷居しずくの外の、苔こけの生えた内井戸うちいどには、いま汲くんだような釣瓶つるべの

雫しずく、——背戸せどは桃もただ枝うちの中に、真黄色まがねに咲いたのは連翹れんぎょう

の花であつた。

帰りがけに密そつと通ると、何事も無い。襖ふすまの奥に雛はなくて、前

の壇だんのも、烏帽子えぼし一つ位置ちのかわつたのは見えなかつた。——こ

の時に慄然ぞつとした。

風はそのまま留やんでいる。広い河原に霞かすみが流れた。渡れば鞆まりこ子の宿しゆくと聞く……梅、若菜わかなの匂にも聞える。少し渡つて見よう。橋は詰しづめの、あの大樹たいじゆの柳の枝のすらすらと浅あさみどり翠あざみどりした下を通ると、樹の根に一枚、緋ひの毛氈もうせんを敷いて、四隅を美しい河原の石おきで圧おさえてあつた。雛市ひないちが立つらしい、が、絵合えあわせの貝一つ、誰たれもおおらぬ。唯と、二、三町春ちようの真昼に、人通りが一人もない。何故なぜか憚はばかられて、手を触れても見なかつた。緋の毛氈は、何処どこのか座敷から柳の梢こずえを倒かさまに映る雛壇の影かも知れない。夢を見るように、橋へかかると、これも白い虹が来て群ぐんじよう青の水を飲むようであつた。あれあれ雀が飛ぶように、おさえの端はしの石がころころと動

くと、柔かい風やわらに毛氈まを捲いて、ひらひらと柳の下枝したえだに搦からむ。

私は愕然として火を思つた。

何処どこともなしに、キリリキリリと、軋きしる轅ながえの車ひびきの響。

鞠子まりこは霞なむ長橋ながばしの阿部川の橋の板を、あつちこつち、ちらち

らと陽炎かげろうが遊んでゐる。

時に蒼空あおぞらに富士を見た。

若き娘に幸さちあれと、餅屋の前を通過とおりすぎつつ、

——若い衆しゅ、綺麗きれいな娘さんだね、いい婿むこさんが持たせたいね——

——ええ、餅屋の婿さんは知りませんが、向う側のあの長い塀、

それ、柳のわきの裏門のありますお邸やしきは、……旦那、大財産家だいざいさんか

でございましてな。つい近い頃、東京から、それはそれは美しい奥さんが見えましたよ——

何とこうした時は、見ぬ恋にも憧憬あこがれよう。

欲しいのは——もしか出来たら——にせむらさき 修紫げんじびなの源氏雛、姿も国く

にさだ 貞にしきえの錦はなぎり絵ぐらいな、花桐おぼろづきよを第一に、藤ふじの方かた、紫たそがれ、黄昏たそがれ、

かつらぎ 桂木、桂木は人も知った朧月夜おぼろづきよの事である。

照りもせず、くもりも果てぬ春の夜よの……

この辺は些ちつと酔つてるでしょう。

青空文庫情報

底本：「鏡花短篇集 川村二郎編」岩波文庫、岩波書店

1987（昭和62）年9月16日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二七卷」岩波書店

1942（昭和17）年10月

初出：「新小説」

1917年（大正6年）3月

入力：砂場清隆

校正：松永正敏

2000年8月30日公開

2005年3月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雛がたり

泉鏡花

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>